

原子カムラの構造分析から合意形成論へ(5) 黎明期における「原子カムラ」のプロトタイプ

Analysis of the structure of *Genshiryoku-mura* toward a paradigm shift of consensus building
(5) - The prototype of *Genshiryoku-mura* -

*澤田 哲生¹

¹東京工業大学・原子炉工学研究所

日本の原子力研究開発の黎明期にその骨格が形成された「原子カムラ」のプロトタイプについて、湯川史料から見えてくる癒着構造について論じる。

キーワード：原子カムラ、湯川史料、癒着構造

1. 緒言

本論では、湯川秀樹の歴史資料（湯川史料）に含まれる原子力関係資料に基づいて、原子力研究開発の癒着構造のプロトタイプ（原型）を明らかにし、原子カムラの由来に関する一考察を提示する。

2. 方法

研究方法は、湯川史料および関連する文献などの分析と原子力関係者への聞き取り調査である。

3. 原子力村と原子カムラ

3.1 「原子力村」

「原子力村」という呼称は、1970年代に東京電力(東電)内部における原子力部門の閉鎖性を揶揄する隠語として使われていた。「原子力村」が、活字メディアに登場するのは、1980年代はじめ、月刊誌「原子力工業」においてである。

3.2 カタカナ「原子カムラ」というディスクール

原子力村を「原子カムラ」とカタナカの“ムラ”で最初に呼称したのは、活字メディア上では、飯田哲也である[1]。筆者は、カタナカ村にした真意を飯田に確かめたところ、原子力を受け入れ推進した基礎行政単位としての“村”と産官学をまたぐ構造体としてある集合組織を指す“村”を区別するためにカタカナ“ムラ”を用いたとのことであった。

4. 原子カムラという癒着構造体のプロトタイプ

原子カムラの癒着構造については3.11 後様々なメディアで論じられた。湯川史料のなかの1957年当時の原子力委員会配布資料に、原子力研究機関、学術会議、電力会社、製造会社、その他関連する組織体や企業体が、国策である原子力研究開発を担うものとして具体的名称をもって挙げられている。これは、3.11 後メディアが分析した癒着構造体と基本構造が同型である。すなわち、この初期に規定された組織横断型集合組織が原子カムラの原型になったと考えることが出来る。

参考文献

[1] 飯田哲也「原子力村の解体と市民社会の再構築」Ronza, 1997年2月号

*Tetsuo Sawada¹

¹Tokyo Institute of Technology, Research Laboratory for Nuclear Reactors